

令和3年度「世界の食虫植物展」の開催について

藤井智展

はじめに

食虫植物は、その珍奇な姿から人気の高い植物である。また、「虫を食べる」という特殊な生態や「虫を捕らえる」という動きを持つ植物であることから、子供からの人気も高い。そこで、例年子供が多く訪れる夏休み期間に食虫植物展を行っている。令和3年度も例外ではなく、夏休みの7月17日(土)～8月15日(日)にかけ食虫植物展を開催した(写真1)。例年と異なる点として、「アリと生きる植物展」と共同開催となった。ここでは令和3年度の食虫植物展の実施について記す。

展示した食虫植物

この度の食虫植物展では、アルドロバンダ(ムジナモ)1品種、ウトリキュリア(タヌキモ・ミミカキグサ)35品種、ゲンリセア1品種、サラセニア46品種、セファロタス1品種、ディオネア(ハエトリグサ)5品種、ドロセラ28品種、ドロソフィルム1品種、ビブリス1品種、ペンギキュラ(ムシトリスミレ)12品種、ヘリアンフォラ1品種、ネペンテス(ウツボカズラ)38品種の計9科、12属、170品種を展示した。



写真1 アリと生きる植物展(奥)・令和3年度世界の食虫植物展(手前)の様子

特筆すべき展示種

この度の食虫植物展ではヘリアンフォラを常温、常湿の展示温室で展示した。ヘリアンフォ

ラはギアナ高地原産のサラセニア科の植物で、高温が苦手である。そのため、日本では冷房、加湿された密閉容器内で栽培されることが普通である。そのため、真夏の展示会では展示が難しい種類の一つであった。昨年度、こんちゅう館での展示後に譲り受けた、ヘリアンフォラの人工交配種「*Heliamphora heterodoxa* × *H. minor*」を展示した(写真2)。この種は本属としては暑さや乾燥に強く剛健なため、展示に耐えうると判断した。植物体の調子を見ながら展示を行うと、最高35℃にもなった夏の暑さにも耐え、また、特別な管理を行わずとも弱ることなく展示を継続できた。



写真2 *Heliamphora heterodoxa* × *H. minor*

また、本年度の食虫植物展では新規に次のウツボカズラ4種を導入した(写真3-6)。*Nepenthes maxima* 'Wavy leaf Red'はマキシマの選抜種で葉がうねり、葉や捕虫袋が赤色を呈す。*N. ampullaria* 'Red'は種内の個体選抜で赤い卵型の捕虫袋を株元に多数つける。*N. rafflesiana* seedingはラフレシアナからの実生を選抜した個体である。大型で、ラフレシアナ様の独特な形状の捕虫袋を付ける。*N. veitchii* 'Barrio No.2' × (*N. lowii* × *N. ventricosa* 'Red')は高山性の*N. lowii*の血が入っており、中間性種の*N. ventricosa*と*N. veitchii*を掛け合わせることで耐暑性を得た人工交配種である。袋や植物体の形質は*N. veitchii* 'Barrio No.2'(通称ビーチアカズキン)の性質が色濃く出ており、植物体全体を微毛が覆い、節間は短く、赤い蓋の捕虫袋を付ける。袋のくびれは*N. lowii*による特徴であると考えられる。



写真3 *N. maxima* 'Wavy leaf Red'



写真4 *N. ampullaria* 'Red'



写真5 *N. rafflesiana* seeding



写真6 *N. veitchii* 'Barrio No.2' × (*N. lowii* × *N. ventricosa* 'Red')

食虫植物解説パネルの更新

食虫植物展で使用していた解説パネルは長年更新されておらず、情報が古いものや写真が色あせたものが多くあった。そのため、新規に総論と各属の解説を作成した（写真7）。



写真7 新規作成した解説パネル

アリ植物展との共同開催と展示の変更

今年度の食虫植物展は期間の前半（7月17日（土）～8月1日（日）まで）はアリをその植物体内に住まわせ共生する植物「アリ植物」の展示と共同開催ということになった。展示温室の半分をアリ植物、半分を食虫植物の展示と分けて行った。アリ植物展が終了した8月2日以降も食虫植物展は継続するため、展示物を移動し、展示スペースを広げる必要があった。

8月2日からの展示では、南側（フクシア温室側）に置いてあった広島県食虫植物同好会の出品株を北側（サボテン温室側）に移動した（写真8）。南側には実生や葉挿し、日本産種の展示などを行い、栽培に係るパネルを増やした（写真9-11）。あまり展示で見ることのできないウツボカズラの实生苗や、注意が必要なサラセニアのウイルス株、ドロセラの挿し葉増殖の様子などを展示した事で教育・普及に関する部分を充実させた。



写真8 出品株の移動 アリ植物の展示場所へ移動



写真9 ウツボカズラ実生



写真10 ドロセラ・カペンシス葉挿し



写真11 日本産食虫植物コーナー

まとめ

今年度の食虫植物展は期間中に14,613人の入園があった。夏休み、サマーフェア期間中に会期が重なることから親子連れの入場者が多く、珍奇な姿の食虫植物、アリ植物に興味を示す子供が多く見受けられた。子供心に訴える植物として食虫植物の魅力は高いため、夏の定番企画として継続したい。

「アリと生きる植物展」の監視業務に当たっていた職員が食虫植物についても細かく解説を行っていた。普段は関心を示す人が少ないドロセラやウトリキュラリア、ピングキュラの前に人が集まって見ている姿があり、直接解説することの大切さを感じた。言葉による解説で来園者の知識を増やすとともに、植物についての豆知識や魅力を知ってもらうことができ、満足度も高かったように感じられた。

古くなっていた解説パネルを作り直したことで、写真や解説内容が新しくなった。育て方や日本の食虫植物など、作りきれていない部分もまだあることから、来年度もより良いものを目指して解説や展示内容をアップデートしていきたい。